

琉球大学学術リポジトリ

《国語科》「言葉による見方・考え方」を働かせた
深い学びの実現(1年次) :
国語科における一人一人の学びに向かう力のみとり
を通して

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属中学校 公開日: 2021-08-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗國, 哲郎, 仲原, 英孝, 金城, 尚, 村上, 呂里, 高瀬, 裕人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48826

《国語科》

「言葉による見方・考え方」を働かせた深い学びの実現（1年次）

—国語科における一人一人の学びに向かう力のみとりを通して—

栗園哲郎* 仲原英孝* 金城尚* 村上呂里** 高瀬裕人**

*琉球大学教育学部附属中学校 **琉球大学教育学部

I 主題設定の理由

1 社会的な背景から

中学校でも、来年2021年度から新しい学習指導要領が全面実施される。学習指導要領において、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」とあり、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を「言葉による見方・考え方を働かせ」ながら、言語活動を通して、生徒たちのうちに育んでいくことが必要とされている。国語の授業において、生きる上での学びにつなげることができていない生徒や国語を学ぶ意義を自分事として捉えることができていないという課題がよく見られる。これらの課題とこれまでの本校国語科の研究成果を踏まえながら、本県や学習指導要領の目指す授業像を考慮した研究を進め、本年度より取り組み始めた本研究を通して「主体的・対話的で深い学び」¹⁾の実現に向けての授業改善のひとつの具体的な在り方を広く発信できたらと考える。

2 これまでの研究から

前年度までの研究の成果と課題を次に挙げる。

(1) 成果

- ・生徒の学びを想定しながらの単元を構想することにより、生徒の学びを中心に据えた授業の実現へつなげることができた。
- ・学習指導案に「期待する生徒の姿」と「深い学びへの手立て」の二項目を追加することで、授業者の学習指導の方向性について整理することができ、各学校でも生徒の「深い学び」へと導くことができる示唆となった。
- ・単元のなかで複数回、振り返りを設定することで、生徒が自分の学びを認知し修正する姿が見られた。
- ・OPP シートの生徒の記述を活用し、授業者が次の授業改善に繋げることができた。
- ・OPP シートに「振り返りの視点」を提示することで、

(2) 課題

- ・学習苦手群である生徒が自分自身で学びを俯瞰的にみとり、自己調整するための効果的な手立てが十分とはいえない。
- ・問題解決の場面で、多面的・多角的に見方・考え方を広げることができる対話活動がまだまだ十分に充実したものとなっていない。
- ・「言葉による見方・考え方」を働かせた小中の学びの連続性を視野に入れた教材開発の模索。

3 生徒の実態から

本校の生徒の実態として、昨年度までの研究から「対話において指示されたことのみを伝えるだけになっている」「自らの学びの認識できず自己調整することができない」「言葉を自らの言葉として獲得することができていない」という課題がみえてきた。沖縄県学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡにも「自己肯定感の高まり」「学び・育ちの実感」というキーワード²⁾があり、主体的に学習に取り組む態度（自らの学習を調整し、粘り強く取り組む）につながる共通の課題も見られた。また、学習指導要領の「単元など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、言葉の特徴や使い方などを理解し自分の思いや考えを深める学習の充実を図ること。」という表記と同様、「自らの言葉としての獲得」が課題となっている。

II 本研究の目的

本研究の目的は、国語科における一人一人の学びに向かう力のみとりを通して、自己調整・修正できる生徒及び言葉への自覚を高められる生徒を育成することにある。

Ⅲ 目指す生徒像

- 1 自らの学びをメタ認知し、俯瞰・他者との関わりの中で考え方を修正したり、伝え方を工夫したりと自己調整・修正できる生徒。
- 2 「言葉による見方・考え方」を働かせ、言葉への自覚を高められる（自分の言葉として獲得できる）生徒。

Ⅳ 研究内容

1 自己調整・修正できる生徒とは

「自らの学びをメタ認知し、俯瞰・他者との関わりの中で考え方を修正したり、伝え方を工夫したりと自己調整・修正できる生徒」とは、単元の学習において自らの理解度や目標に対する学習の到達度を認識することができ、その認識をもとに自らの学びを調整・修正することができる生徒である。つまり、自らの学びを自覚化できる生徒のことである。

櫻井(2020)は、子どもの自ら学ぶ意欲が発現するプロセス^③には、「欲求・動機→見通し→学習活動→結果→振り返り(自己評価)→認知・感情」があり、そのプロセスが順当に進行するには、「安心して学べる環境」「情報」「メタ認知」が必要だと述べている。「安心して学べる環境」とは、物理的に安全な環境(温度湿度が安定し、危険のない教室)と対人的に安心な環境(サポートしてくれる教師やクラスメイトがいる)のことである。「情報」とは、授業での自らの知識や友だちの考え、テスト結果や激励などのことである。「メタ認知」とは、自分の学習状態をモニターして、その状態を理解したり調整したりする働きのことである。

課題にもあったように、学習苦手群の生徒自らの学習状況の認知や自己修正のための手立てが十分になされていないという現状があり、これらの解決のためにこれまで使用していた「OPPシート」の活用が有効だと判断した。生徒は「OPPシート」により、自らの学びをメタ認知することができる。それは「主体的に学習に取り組む態度」つまり、「学びに向かう力」に必要な活動だと言える。

国語科では、自らの学びをメタ認知できるよう「OPPシート」を活用し、授業内で振り返りの時間を設けることで、単元の学習中に俯瞰・自己調整できるような授業デザインの工夫を試みた。

2 「言葉による見方・考え方」を働かせた深い学びの実現

「言葉による見方・考え方」とは、学習指導要領では「生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることである」と書かれている。本校の目指す生徒像である『「言葉による見方・考え方」を働かせ、言葉への自覚を高められる(自分の言葉として獲得できる)生徒』とは、つまり、言葉を深く学び、言葉を通して学ぶことによって、学ぶことの魅力や喜びを感じ、言葉を借りものの言葉ではなく、自分の言葉として獲得し、言葉を捉え直すことのできる生徒のことである。

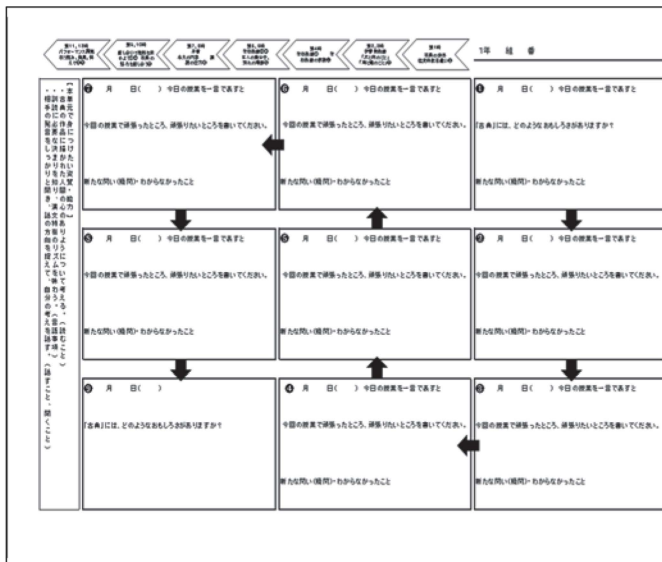
このような生徒の育成のために、授業内での発問の工夫及びスモールステップを取り入れたパフォーマンス課題設定の工夫に取り組んだ。

3 一人一人の学びをみとるとは

本校国語科では、これまでの研究により学びのみとりである評価を、次のように捉えている。それは、学習者の学習実態の把握と成長のための評価と授業者の振り返りと次の授業改善につなげるための評価である。今回はこの学びのみとりを学びに向かう力のみとりにも生かしたいと考えている。

そして、本校国語科は、生徒一人一人の学びをみとるための手段として、先述にもあった「OPPシート」「OPPA(1枚ポートフォリオ評価)」を実践している。「OPPA」の開発者である堀(2013)は、「今求められているのは、授業者自身が簡単にすることができる授業評価と改善の具体的方法である」「多忙な教育現場で、学習者の資質・能力の育成と教師の授業評価と改善などが可能な方法として開発した」^④と述べている。

OPPAとは、授業者のねらいとする授業の成果を、学習者が一枚の用紙(OPPシート)の中に授業前・中・後の学習履歴として記録し、その全体を学習者自身に自己評価させる方法である。大村はまも学習成果を記録させ、単元の学習の終了時に学習成果を構造的に把握させようとした。本校国語科では、堀らのOPPシートを参考に生徒一人一人が自らの学びをみとり、同時に教師も生徒一人一人をみとる実践を行う。(図1)



単元の学びの流れを表示する。学びの見通しがイメージでき、生徒自身が学びを俯瞰できる。

第1時と最終時で同じ問いを書く。学習の前後を比較することで、学びの深まりをみとることができる。裏面のパフォーマンス課題に取り組む際、OPPシートを振り返ることで、自らの学びを自覚し、毎時間の成果を確認することができる。

単元途中の振り返りにより、自らの学びを修正・調整することができる。交流することで他者の考えを通して理解することもできる。学習苦手群の生徒にとっても効果的に働く。毎時間の回収・コメントにより生徒の自ら学ぶ意欲向上にもつながる。

4 具体的な取り組み

図1 OPPシートの例

(1) 自らの学びを認知するための単元デザイン

本校国語科では、単元のゴール(目指す姿)に向かってパフォーマンス課題を設定・実践・評価し、その一連の活動を他の単元においても繰り返し行うことで、「言葉による見方・考え方」を働かせた深い学びの実現を目指している。毎時間の授業の振り返り以外にも、単元の中で複数回の振り返りの時間を取り入れることで、生徒ははじめの考えから、単元のゴールの姿に向けて、どれほど到達できているのか(または到達できていないのか)をメタ認知することができる。この複数回の振り返りが学びの自己調整に重要な過程となる。単元のデザインを図に表すと、次のようになる。(図2)

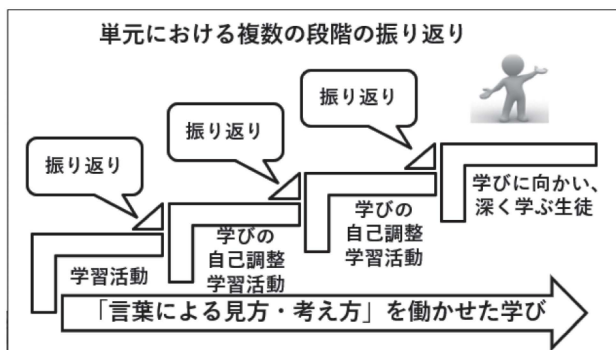


図2 複数段階の振り返り例

(2) OPPシートを用いたみとりと評価方法

指導計画における評価の位置づけにおいて、形成的評価の一部として「OPPシート」を用いることで、日々の授業における生徒の学びをみとることもできる。授業後にOPPシートは、毎時間提出させ、授業者が適宜コメントを残すことで、生徒の意欲向上につながる。また、必要に応じて、OPPシートに記述してほしい問い

を設定することで、本時で身につけてほしいことを授業者と学習者で共有することも可能である。(図3)

以下、OPPシートを活用した工夫を提案する。

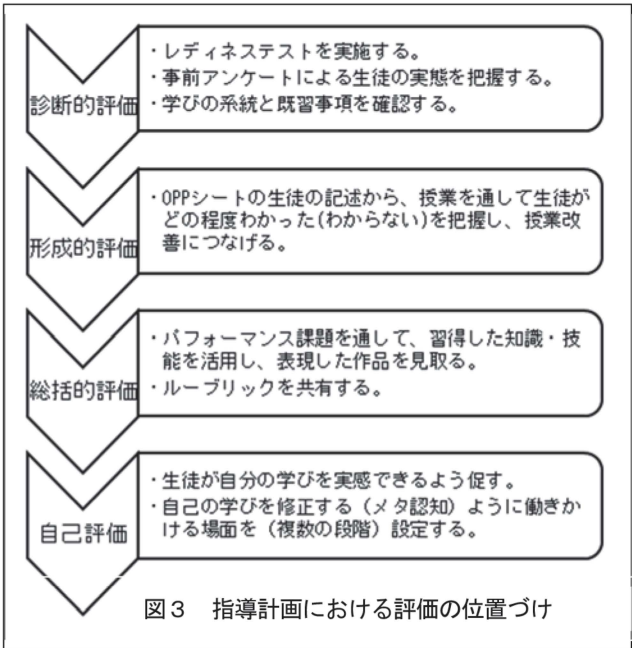
①自らの学びを自覚できるシートの工夫

本時でどのように学習し、何が理解できたかを記述することで生徒の学びが評価できる。シートに、「本時の授業で何がわかりましたか？」と提示しておくことで学びの評価をすることができ、「本時の授業で頑張ったこと、頑張りたいこと」と印字することで生徒の学びに向かう姿をみとることができる。後者を印字する際には、単元における評価すべき資質・能力は、ワークシートに記述させる等の工夫により評価が可能となる。毎時間の授業後にOPPシートとワークシートを毎時間提出させ、授業者は生徒の学習実態を把握とコメントにより生徒の自ら学ぶ意欲向上にもつながる。

また、本時で身につけてほしい授業者の視点と学習者の視点とのずれを埋めるため、OPPシートに記述してほしい問いをあらかじめ設定できる。例えば、説明的文章を読む授業であれば、第1時に「本時の説明文で新しく分かったこと、疑問に思ったこと」と設定し、単元の授業が進んだところでは、「筆者の工夫した書き方は、どのような効果があるのか」と設定することで授業者が求める項目について記述させることもできる。

②「自己調整」「粘り強さ」のみとりの工夫

OPPシートは、生徒の単元の学びの過程を一枚で見渡すことができるという特長がある。単元の全体を通して、生徒自身が単元の課題系活にむけてどのような



知識を得、どのような力が身についたかを把握することができる。適宜、生徒の OPP シートの記述を紹介したり、交流したりすることで自らの学びと他者の学びを比較、自らの学びの調整・修正、認識することができる。また、パフォーマンス課題取り組み時には、これまでの自らの記述を参考に課題に取り組むことで単元のなかで不足していた力を改めて確認することができ、自己評価や分析に役立てることができる。

学習苦手群の生徒は、単元のゴールとそれまでの各授業を結び付けることができていない。適宜、OPPシートで単元のゴールを確認しながら前時の振り返り、教師によるコメントにより励まして「達成への学習意欲」^③の喚起も可能となる。

(3) 「言葉」と向き合うための工夫

本校国語科では、「学びに向かう力(姿)」には

- ①学ぶおもしろさ、学ぶ楽しさ
- ②目的・目標、自己調整
- ③努力、粘り強さ
- ④学習、課題解決への自信
- ⑤協力、助け合い

の五つのキーワード^③があると考え、これらをもとに、国語科として、育成すべき「学びに向かう力(姿)」として、以下のものがあると仮定した。

- ①言葉や課題に対して学ぶ楽しさを実感しながら学んでいる。
- ②学習内容がどのように役立つか、言葉の捉え方や学習の仕方を工夫・修正している。
- ③自分で考え、これまでの学習をふり振り返りながら言葉にこだわり粘り強く取り組んでいる。
- ④課題に対して自分ならできるようになるという自信がある。
- ⑤ペアやグループでの対話により自分の考えや表現を見直したり、協力し合って取り組んでいる。

これらの力(姿)は、「言葉による見方・考え方」を働かせながら、「言葉」に向き合っている力(姿)とも言うことができる。

これらの力(姿)を OPP シートや毎時間でのワークシートでみとれるよう意識して、各学年の実践の単元デザインを工夫した。本校国語科が考える「学びに向かう力(姿)」の五つの要素を以下に提示する。(表1)

学習意欲	学びに向かう要素		言葉に向かう力(姿)
内発的な学習意欲	①学ぶおもしろさ、学ぶ楽しさ	興味・関心	言葉や課題に対して学ぶ楽しさを実感しながら学んでいる。
		楽しさ	
達成への学習意欲	②目的・目標、自己調整	目的・目標	学習内容がどのように役立つか、言葉の捉え方や学習の仕方を工夫・修正している。
		自己調整	
	③努力、粘り強さ	努力 粘り強さ(持続性)	自分で考え、これまでの学習をふり振り返りながら言葉にこだわり粘り強く取り組んでいる。
向社会的な学習意欲	④学習、課題への自信	自己効力感	課題に対して自分ならできるようになるという自信がある。
		⑤協力、助け合い	

V 実践事例

1 第1学年

- (1) 単元名：「人物像の魅力を伝えよう
～朗読会を通して～」
学習材：「飛べ かもめ（補助教材）」
「さんちき（本教材）」
（東京書籍『新しい国語 1』）

(2) 単元で育成したい資質・能力

- ①場面の展開や登場人物の相互関係、心情の変化などについて、描写を基に捉えることができる
〔思考力、判断力、表現力〕C(1)イ
②人物像の読み取りをもとに朗読する際の工夫をしようとしている〔学びに向かう力、人間性等〕

(3) 本実践の目的

本単元は、「さんちき」（本教材）で読み取った人物像をもとに小学6年生に向けた朗読会で表現していくなかで、身近にある言葉をみつめることを目的としてパフォーマンス課題を設定している。「飛べ かもめ」（補助教材）を通して描写（情景描写・行動描写）によって登場人物の心情の読み取りができることを理解し、「さんちき」での人物像の深い読み取りにつなげようと考えた。また、具体化された人物像を参考に各場面（選んだ場面）における登場人物の魅力を「この描写からこのような人物像がわかる」という風に生徒自身に解説させ朗読会に向けての準備させることで、自らの読み取りと他の読み取りを比べ、自らの読み取りを修正する姿もみとることができる。京都弁という使い慣れない言葉をどのように人物像と関連させ表現できるかも生徒の工夫が必要で、グループで言葉による見方・考え方を働かせながら描写を基に人物像を捉え表現する力を身につけさせることができると考えた。

また、生徒は、パフォーマンス課題である朗読会に向けて自分なりに朗読会を成功させようとする過程において、単元で学習した知識と小学校の既有知識の「詩や物語、伝記などを読み、内容を説明したりする。」「登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉える。」「人物像や物語などの全体像を具体的に想像し、表現の効果を考える。」などの能力も活用しながら、「自己調整」や「ねばり強さ」という「学びに向かう姿」をみとることができるであろう。

(4) 実践内容

第1時で、単元のゴール（パフォーマンス課題）を全体で確認し、学習前に「人物像を理解するにはどうすればよいですか？」という問いに対する答えを各自考え、「飛べ かもめ」の初発の感想を書かせた。

【パフォーマンス課題】

今度、小学校6年生に「さんちき」の朗読会を開くことになりました。6年生は、来年自分たちになる憧れの中学生の朗読会を大変楽しみにしています。小学校の先生たちもみなさんの成長ぶりに期待しています。「さんちき」に登場する「親方」と「三吉」の人物像を読み取り、読み取った人物像をもとに場面を選び朗読しましょう。また、朗読する場面における登場人物の人物像を表すような表現についても解説し、人物像を紹介しましょう。

第2時では、登場人物の心情を表していると考えられる描写を挙げさせて、心情読み取りには登場人物の言葉や表情、行動そして場面の様子（情景）が手がかりになることを確認した。

第3、4時から「さんちき」を通読、舞台となる京都の時代背景の把握。祇園祭の映像を見せたり、職人に対するイメージなどを確認したりした。あらすじのまとめ方を確認し、本文のあらすじを個人でまとめ、グループで交流しながら小学生6年生にわかりやすいあらすじを推敲し、グループで作り上げた。

第5時で、個人で三吉・親方どちらか一方の人物像の読み取りを行い、生徒は必要に応じてOPPシート裏にある指定された人物像の読み取りに加筆していく。

第6～8時では、侍と車大工（親方）の比較により、親方の生き方をはじめとする人物像の再確認。グループで朗読する場面を選択し、その場面から読み取れる人物像を確認するための交流をした。さらに朗読場面の台本に、読み取った人物像を参考にグループで読み方の工夫の書き込みながら台本を作り上げた。

第9、10時では、パフォーマンス課題を前に、役割分担（三吉、親方、あらすじと見どころ紹介、地の文）を確認し、グループ練習の中で役割を決めた。

台本をもとに他グループとの交流で伝えたい人物像が伝わっているかを確認・修正し、本番の朗読（ビデオ撮影）に臨んだ。朗読会では、自分たちが表現したかった人物像が表現できているか、工夫されているところなどを学級で確認し、相互評価を行った。OPPシートでは、朗読会の撮影を終えて、改めて「人物像を理解するにはどうすればよいですか？」という問いに対して考えさせた。

(5) 実践の考察

① 授業デザインの振り返り

朗読会を目的とし、そのために必要な人物像の読み取りを加筆修正を加えながら授業を進めることで、生徒は自らの読み取りを交流を通して調整することができていた。「朗読会」は、基本的に会話のみで成立させるものであるが、生徒の「地の文がなければ、雰囲気は伝わらない。地の文は必要です。」という発言で、地の文も役割として加えた。生徒は、地の文からも物語の状況や雰囲気、人物の様子を捉えることができるという考えから地の文の必要性を訴えたと考えられる。地の文の役割を加えたことで、生徒によっては淡々と表現すべき地の文を雰囲気を出すために抑揚や緩急をつけるという工夫が見られた。人物像を読み取るために、何度もシナリオを読み返したり、グループで何度も音読したりする姿があった。

② 学びのプロセス（授業前後の変容・比較）

生徒 A と生徒 B（学習苦手群）の比較で本実践の検証を行う。第 1 時と第 10 時の OPP シートで「人物像を理解するにはどうすればよいですか？」という問いに対し、それぞれ次のような記述が見られた。（表 2）

表 2 生徒 A、生徒 B の授業における変容の様子

生徒 A 第 1 時	人物が話している場面や心の声みたいな文を使って考える。
生徒 A 第 10 時	その理解したい人物の心の声のような文や行動から読み取る。 人物の発言が敬語(おちついて)タメ口(フレンドリー)方言(その他)かどうかで性格をよみとる。
生徒 B 第 1 時	文章をしっかり読む(その人物に着目して)
生徒 B 第 10 時	文章に書いてあることを理解し、その人物になりきってみる。

第 1 時で生徒は、「飛べ かもめ」を通読し、初発の感想を書いたあとにまとめとして、OPP シートを記述している。描写をもとに自分の予想する読み取りを記述で残していた。生徒 A は、小学校での既有知識を本文の通読とつなげ、記述している。第 10 時では、情景描写や会話だけでなく、行動描写や会話から読み取れる関係性も人物像理解へのヒントとなることに気付くことができている。第 5 時の人物像読み取りでは、本文の描写から三吉の性格や親方との関係を読み取ることができていた。また、相手との話し方(敬語、タメ口など)によっても性格が読み取れると気づき、このよ

うな記述をしている。生徒 A は、会話及び話し方から登場人物同士の関係性を理解し、第 7 時からの朗読会シナリオの工夫でも「イントネーションは調べる必要がある」「関西出身の人という笑い方が難しい」というコメントがあり、親方の「『はっはっはっ』という笑いを自分の笑い方で読む」とグループで捉えた人物像を表現しようとする姿が見られた。また、朗読会を終えての感想では、三吉の年齢を踏まえ「声変わり前の子供なので声が高い」など人物像を明確に捉えている様子とそれを伝わりやすく表現しようとする姿勢が見られた。実際に朗読会では、生徒 A は親方を担当し、三吉は他の生徒(声変りをしていない生徒)を起用していた。

生徒 B は、第 1 時で人物に注目する必要があることは理解しているが、その方法がわかっていなかった。第 10 時では、「その人物になりきってみる」という記述が加えられている。朗読会に至るまでの学習で、情景描写や行動描写、会話から人物像やその関係性が読み取れることを理解しこのような記述となっている。

第 5 時の人物像について、ワークシートに記述することはできていなかったが、あらすじや見どころ作成では担当の原稿にあれこれアドバイスをしたり、朗読会に向けての練習では、生徒 A の意向で三吉役を担い、率先して何度もグループ練習を行う姿が見られた。

このように、「人物像の理解」について第 1 時では、会話や心の声、文章をしっかり読むという抽象的な考えから、第 10 時のように行動描写や会話からわかる関係性、人物像をグループで共有し、練習の中で自ら「三吉」の人物像を再構築し表現することで人物像の理解を深めることができるという姿が確認された。

③ 授業デザインの改善点

パフォーマンス課題に向けて、情景描写と行動描写をはじめとする表現(言葉)に着目しながら、読み取った人物像を、加筆するよう生徒に確認し、毎回の授業での気づきを書かせた。交流をすることで読み取った人物像を確認したり、比較したりできた。しかし、朗読に関しては練習時間の確保や日頃から朗読に慣れていないことから恥ずかしさを最後まで拭うことができなかった生徒もいた。日々の授業から音読はしているが、物語の登場人物になりきる難しさが課題となった。様々なパターンで何度も読ませる工夫をする必要性があった。

2 第2学年

(1) 単元名 読書への招待

「世界の子どもたちのことを伝えあおう

～フォトストーリーを書こう～

教材名 ラッセル・フリードマン／千葉茂樹 訳

『小さな労働者』

(2) 単元で育成したい資質・能力

・表現の工夫とその効果などについて、読み手からの助言などを踏まえ、自分の文章のよい点を見いだす力を育てる。

〔思考力、判断力、表現力等〕 B (1) オ

・読書を通して視野を広げ、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。

〔学びに向かう力、人間性等〕

(3) 本実践の目的

本教材は、十九世紀のアメリカで社会問題となっていた「児童労働」の問題を写真とそれを説明する文を合わせて紹介し、児童労働問題を訴えたルイス・ハインの活動を取り上げた文章である。見る者に何かを訴えかけてくる幼い子どもたちの写真とそこに付された文を合わせて読み取ることで、文章の解釈がより深まっていく。また、写真の放つメッセージとそれを補い、より強いメッセージへと高めていく文章でもある。たった一枚の写真でも強いメッセージを放つことができることに気づき、「写真の持つ力」を感じることで、読書・選書の幅を広げ、よりよく読書に向かう姿勢を身につけさせたい。

生徒はこれまで、書くことについて「枕草子・徒然草」では随筆を書く活動を行い、自分の思いや考えを相手に伝えるための工夫や相手の随筆を読んでその良さを具体的に表現するという活動を行っている。また「鯉節―世界に誇る伝統色」では文章の要約と筆者の表現の工夫について学び、要約することや筆者の表現の工夫が内容理解、自己の考えの形成に有用であることを確認している。また本学級の生徒は、発表に控えめな生徒もいるが、しっかりした態度で授業に臨み、課題に取り組むことができる。しかし、写真などの非連続型テキストから情報を読み取ることが十分にできない生徒もいるため、他者との交流を通して読み深める学習を展開したい。

本単元は、「フォトストーリーを書く」という学習課題を設定し、まず「小さな労働者」の内容を学習する。

次に、世界各国の子どもたちの様子が紹介された書籍のなかから写真を1枚選び、ルイス・ハインに倣ってフォトストーリーを書き、世界の子どもたちの様子を他者へ紹介しあう。そして互いに表現を評価しあうという単元を設定している。写真と文章を通して外の世界と出会い、今の自己が揺さぶられる体験を経て「学びに向かう力」の種を蒔きたい。そして、「感じたことを言葉で伝えたい、しかし簡単にはできない」という気づきを得ることで、言葉にこだわり学び続ける姿勢を育てたい。この学習を通して自己の思いを的確に伝えるために言葉を吟味する体験をし、そうして生まれた作品を互いに認め合う活動を行えば、生徒が自分の文章の良い点や改善点に気づく力を身につけることができると考えた。

(4) 実践内容

第1時では「写真を見る練習」「全文を読み初発の感想を書く」という2つの活動を行った。初めに写真(「焼き場に立つ少年」「戦前の沖縄の写真」)を見せ、それぞれからわかること・感じることを交流させ、写真を読み取る練習を行った。また、単元末のパフォーマンス課題を提示し学びのゴールを意識させた。

【パフォーマンス課題】

あなたの勤める琉大美術館では企画展「世界の子どもたち」という写真の展示会を開催することになりました。その展示会であなたは1枚の写真を任されることになりました。ハインと同じように1枚の写真でフォトストーリーを書き、企画展を成功させましょう。

第2時では、「意味段落ごとに小見出しをつける」活動を行った。図表と文章を合わせて読み取ることで各意味段落の内容を容易に捉えることができた。特にパフォーマンス課題として1枚の写真でフォトストーリーを書くことを踏まえて、ハインがどのような思いでフォトストーリーを書いたのかを捉えることができた。

第3時では「本文に付されている写真から1枚を選び、説明文を付ける」活動を行った。これはフォトストーリーを書く練習と位置づけて行ったものであり、1枚の写真からどのような情報・言葉を読み取り、選択し、説明文として構成していくかということを思考・判断・表現することをねらいとした。学習苦手群への手立てとして4種類の説明文を例示したが、そうではない生徒もどのように書けばよいか具体的なイメージを持てたようであった。

第4時では「写真選び」を行った。事前に図書館司書

に世界各国の子どもたちの様子が紹介された本の特集コーナーの設置を依頼し、生徒が各国の様子を比較しながら選書を行えるようにした。「なぜその写真を選んだのか」「その写真を見る人へ伝えたい思いは何か」ということを生徒同士が互いに話し合いながら、その写真に対する思いが深まる様子が見られた。

第5時では、「フォトストーリーを書き、互いにコメントを交流する」活動を行った。どの生徒も、その写真から読み取ったこと、その写真から伝わってくるメッセージをフォトストーリーの読み手に伝えようと、熱心に表現を吟味している様子が見られた。

第6時では、「互いのフォトストーリーを読みあい、表現の工夫を評価する」活動を行った。ここでは、他の学級の優秀な作品を紹介しながら「フォトストーリーを視る視点」を全体で共有し、互いの表現の良さを具体的に評価できるようにした。生徒たちはふせん紙に書かれた評価を踏まえて、表現の振り返りを行うことで自己の表現の良さを自覚することができていた。また、1枚の写真から発せられるメッセージの受け取り方についても互いの良さを認めあっていた。

(5)実践の考察

① 生徒の学習の評価

本単元では、「美術館の学芸員となって、企画展に展示する写真とそれに付する説明文を書く」というパフォーマンス課題を設定した。以下に生徒の作品を示す。

生徒Hの作品

タイトル「スタート地点」

「逃げ出せばいい？」 そしたら撃たれる

「休めばいい？」 そしたら殴られる

やっと終わった一日の仕事 帰る場所は

鍵のかかったせまい部屋

一切自由のないところで 彼らの目に色は映るのか

ただ、生まれた国が別なだけ

たった それだけなのに

みんなが同じ スタート地点を

書く時に工夫した点

その人たちの思いを想像して、なるべく素直な表現で表した。また、例えているようで本当のこと（事実）を書いた。最後は遠回しに私の願いを表現した。

同じ地球上に生きる厳しい環境に置かれた子供たちに思いを馳せ、問いをたたみかけるように繰り返して

「本当のこと（事実）」を以て問い返し、「一切自由のないところで 彼らの目に色が映るのか」と鋭く問いかけ、「みんなが同じ スタート地点へ」という願いで結ばれている。引き締まった文体が、厳しい状況を切り拓きたいという願いの切実さを伝えている。中学2年生としてまっすぐメッセージを受け止め、その素直さゆえに写真から発せられるメッセージが何倍にもなって相手へ発信されている。ルイス・ハインがフォトストーリーという表現方法を通して「どのような思いを相手へ伝えたか」「伝えるためにどのように言葉を工夫したか」を説明文からの確に読み取り、自らのフォトストーリーに生かしている。そうした意味で生徒Hの作品は「深い学び」の跡が感じられる大変素晴らしい作品であると言える。

② 授業デザインの振り返り

本単元は、「写真の持つ力」に気づき、そこから伝わるメッセージを「自分」というフィルターを通して他者へ伝え、他者からのフィードバックを受けて、自己の良さを自覚するという単元を設定した。図表と文章の効果を経験させ、生徒自身の感性によって選んだ写真を筆者に倣って表現することで「学びに向かう力」が表出されるような構成をとった。また、写真から読み取ったことをより正確に相手に伝えるためにどのような表現にすればよいかを考えさせるために、第5時に仮創作の段階での交流を取り入れた。そうすることで、自己の思いがうまく表現できているかどうかを客観的に知ることができ、生徒が修正したり、自分の表現に自信を持ったりする様子が見られた。

③ 授業デザインの改善点

今回、「書く力」とともに「学びに向かう力・姿」の具体化をめざし、単元で育成したい態度を設定した。パフォーマンス課題の「架空の美術館の学芸員」という設定は生徒には遠いものであったが、自己の思いを他者に伝えるために言葉を吟味する姿や、選んだ写真を見直したり、別の写真と比較したりして見るなど、より良い作品を創りあげようという姿が見られた。中学2年生が自分たちとは違う境遇に生まれ育った世界各国の同世代の子どもたちを見つめ、心を動かしていた。そこに「学びに向かう力・姿」の一端が見えた気がした。今後授業をデザインしていくうえで、課題と生徒の距離が近く、「活動したい」と思うような仕掛けがさらに重要になってくるのではないかと。

3 第3学年

(1) 単元名：『伝統文化に親しむ』『古典を生かして語ろう』

学習材：「場面に応じて話そう」

「万葉・古今・新古今」「論語」

(東京書籍『新しい国語 3』)

(2) 単元で育成したい資質・能力

① 目的や場面に応じて古人の言葉を効果的に使い、伝える内容を検討することができる。

[思考力、判断力、表現力等]A(1)ア

② 古典にふれ、自分に通じるものを見出し、古人の言葉を使って思いや考えを伝えようとしている。

「学びに向かう力、人間性等」

(3) 本実践の目的

人前でスピーチをする際、内容を充実させるために他者の言葉や格言などを引用することもあるだろう。今回、話すこと聞くことの学習において、教材「場面に応じて話そう」と古典教材を関連させて扱おうと次のような単元を計画した。

表3 単元構成(全9時間)

次	時	学習活動
一	1	・場面に応じて話すとはどういうことを考える。 ・単元の見通しを持つ。
二	2	・3大和歌集について知り、和歌のリズムを味わう。
	3	・和歌の表現技法を理解し、心情や背景を想像して一首選ぶ。
	4	・選んだ和歌について読み深め、和歌の魅力を書き留める。
三	5	・論語について知って音読し、印象に残った言葉を選ぶ。
	6	・孔子の言葉の理解を深め、座右の銘としたい言葉を選ぶ。
四	7	・場面に応じたスピーチを考え、スピーチ原稿を書く。
	8	・スピーチの練習をしながら原稿を仕上げる。
	9	・互いにスピーチを交流し単元を振り返る。

単元で身に付けたいのは「話すこと」の話題の設定や内容の検討に当たる資質能力である。また、言葉による見方・考え方を働かせて古典を読み、取り上げる和歌や論語を選ぶことで、粘り強さや主体性が発揮されることをねらいとした。さらに、スピーチの原稿化の過程では他者と交流することにより、文言や表現の

修正、内容の再検討など粘り強さや自己調整力が発揮されることもねらいとした。

学びに向かう力を活性化するために本単元では後に示すようなパフォーマンス課題を設定した。また、OPPシートで振り返りを行うことで自己調整につなげるための学びの自覚化を促した。

(4) 実践内容

第1時では、場面に応じて話すことについて考え、パフォーマンス課題を知り、単元の見通しを持った。

【パフォーマンス課題】

- ① 中学1年生が古典(和歌など)を学ぶ意義や魅力を感じられずにいます。そのために、いまいち古典の学習に身が入りません。そこで、先輩として後輩に対して和歌を取り上げてスピーチをすることになりました。
- ② 高校入試の面接で「座右の銘」は何ですかと聞かれました。論語(漢文)の言葉を「座右の銘」として取り上げてスピーチをしようと思います。

第2～4時にかけて、和歌を生かしてスピーチすることを念頭に和歌の学習に入った。音読や現代語訳で内容を理解し、印象に残った和歌を一首選び、言葉一つ一つに着目しながら読み深め交流した。

学習苦手群のある生徒は、「うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとりし思へば」の「あたたかさ」と「悲しさ」の対比的な表現に着目し、考えを交流していた。スピーチにつながる相手意識を持つための「選んだ歌はどんな人にオススメできそうか。」の問いには、「春にふあんを感じていて、おもいを一人かかえている人」と書き、和歌の魅力について「照れる春日とそれをたたえるヒバリにひとり悲しいという対比、あべこべがともていい」とまとめることができていた。

第5時、和歌の学習の記憶が新しいうちにスピーチを形にしておくほうが望ましいと考え、計画を修正しパフォーマンス課題①の原稿の下書きを行った。

第6、7時は論語の学習を行った。座右の銘としたい言葉を探すことを念頭に論語を読んでいった。教科書以外にも論語の言葉を取り上げ、その中から言葉を選び、当てはまる体験を想起した。

「過ちて改めざる、是を過ちと謂ふ」を選んだ生徒が「テストで間違えたところを直さなかったとき同じような問題でまた間違ってしまったという体験」を想起したり、「学びて思はざれば則ち罔し～」を選んだ生徒が「中学校でのアクティブラーニング」を想起したりする姿が見られた。

第8時でパフォーマンス課題②の目的や相手を考え、スピーチ原稿の下書きを行った。

第9時でパフォーマンス課題①と②を互いに読み合い、交流をしながらパフォーマンス課題を仕上げた。論語の言葉から「中学校でのアクティブラーニング」を想起した生徒は、「数学を例にして考えると、公式を覚えようとしても自分で導けなければ自分のものにはならず、」と体験をより具体的に挙げながら、「高校でも考えて学んで、自分の学問の精進に努めていたい」と締めくくり、座右の銘の原稿を仕上げていた。

スピーチを発表し合う時間は確保できず、そのため、単元テスト時に少し時間を確保して発表し合った。

(5) 実践の考察

① 生徒の学習の評価（授業前後の変容・比較）

OPPシートの第1・9時で『自分の話す力』を分析してみよう。」と振り返りの視点を設け、第2～8時にかけては「今日の授業で、スピーチに向けて何が得られましたか。」と振り返りの視点を設けた。

以下は、生徒Aの記述である。

表4 生徒Aの記述

第1時	頭の中で話したいことをまとめ、組み立てていくことが苦手。
第4時	和歌から得られるイメージを具体化、事実として分かることと結びつけることで相手に伝わりやすくなる。
第5時	相手が「思っていると思うこと」「体験したと思うこと、すると思うこと」など相手の状況に合わせると興味をひけると思う。
第9時 ※10時の前半	・順序よく丁寧に考えれば、場面に応じたスピーチができると思う。 ・やっぱり即興でスピーチを組み立てるのは苦手だと感じた。

第4、5時の記述から、和歌のイメージを具体化し、相手の分かることに結びつけることで、「古典を学ぶ意義を見出せない1年生」（パフォーマンス課題①）の興味を惹くことができると考えており、スピーチの話題設定や内容検討の視点を自分なりに獲得している様子がうかがえる。

そして、生徒Aの書いたスピーチ原稿には次のような記述が見られた。

(前略)「ちはやぶる神世も聞かずたつた河から紅に水くくるとは」これは、秋の竜田川に流れる紅葉を詠んだ和歌です。紅葉と言えば来年修学旅行がありますね。沖縄ではあまり見られない紅葉が本当に美しかったです。私はきっと昔の紅葉も美しかったのだらうと感じました。(後略)

生徒Aはイメージした具体的な「紅葉」を、1年生がこれから経験する修学旅行の話題につなげて興味を惹こうとした。言葉と事象・心情を結びつけて、言葉による見方・考え方を働かせているのがうかがえる。また、学びを自覚して生かしており、自己調整が働いていると言える。

最終的に「やっぱり即興でスピーチを組み立てるのは苦手」と書いており苦手意識は払拭されていないが、「順序よく丁寧に考えれば」という言葉からは、スピーチというものの捉えが広がったこともうかがえる。

② 授業デザインの振り返り

スピーチのパフォーマンス課題を設定し古典の学習とつなげることが、学びに向かう力を発揮する場面を生むのにある程度つながったと考える。ある生徒は「春の野にすみれ摘みにと来し我そ野をなつかしみ一夜寝にける」の和歌に「ポカポカした広い野原」をイメージし、「心細いと思っている人」にすすめてきそうだと書いていた。そして、この和歌の魅力を「野原の広さに対して自分のなやみの小ささを知り、勇気がもらえ、心がみたされる」と捉えていた。他者に伝えるという前提があったからこそ、和歌と向き合っただけで捉え方を広げることができたのではないだろうか。

③ 実践を踏まえた授業の改善点

単元は9時間設定だが、途中で修正することがあり、また、スピーチの実践はグループ内で1回に留まるなど時間が足りず、見通しが甘かった。

和歌の読みについて、交流活動を設けて読み深まりや支援が必要な生徒への手立てとしたが、選んだ和歌が各自異なるので共有しづらく、読み深めや支援の手立てとしては十分でなかったと思われる。自分自身の言葉で現代語訳し直すなど、個人の段階で和歌の世界を読み深めることも必要だったであろう。

パフォーマンス課題について、特に和歌のスピーチでは話し方の形式的な部分に気を取られ、読み深めたことを織り交ぜるのが不十分だった。パフォーマンス課題①の設定と取り組み方にも見直しが必要である。

VI 成果と課題 (みえてきたことと次への展望)

1 成果

(1) 自らの学びを認知するための単元デザイン

本校国語科では、「自らの学びをメタ認知し、俯瞰・他者との関わりの中で考え方を修正したり、伝え方を工夫したりと自己調整・修正できる生徒」を育成するために、自らの学びを認知するための単元デザインを実践した。

これまでの研究の成果から、OPP シートを活用して生徒自らの学びを認知させるために単元ごとに毎時間の生徒の記述欄の印字内容の工夫をしたり、教師からのコメントの有効性を確認しながら授業を進めてきた。授業者が求める評価や生徒の実態把握(学びに向かう力(姿)の把握)のためには、やはり OPP シートの有効性が確認できた。今回、「本単元で身につけたい資質・能力」なども掲載したところ、生徒は単元の中で身につけるべき資質・能力及び評価の観点を知ることができ、授業者と学習者の学びの方向性を共有することもできた。

生徒の記述⑧には、

グループの友達と交流をして、1人1人文の書き方がちがったので、文の書き方を理解できたと思います。また、自分が見つけられなかった古典の魅力がわかりました。

という記述があり、「本単元で身につけたい資質・能力」

にもとづいた記述となっている。また、「今回の授業で頑張ったこと」にもとづき、自分ができたこと・できなかったことを把握して記述し、自らの学びの状態も書くことができている。このように自らの学びをメタ認知し、他者との関わりで修正や調整する様子が OPP シートから確認できた。また、このような自分の状態を素直に記述することが次への見通しや自信にもつながるということがわかった。

(2) OPP シートを用いたみとりと評価方法

本校国語科では、2018 年度から生徒一人一人の学びをみとる評価方法として、OPP(1枚ポートフォリオ)シートを実践している。

これまでの課題として、学習苦手群である生徒の学びを自分自身で俯瞰的にみとり、自己修正するための効果的な手立てが十分になされていなかった。そこで、今年度はシートに、「本時の授業で何がわかりましたか?」と提示することで学習内容の評価を、「本時の授業で頑張ったこと、頑張りたいこと」と提示することで生徒の学びに向かう姿をみとることができた。また、生徒の OPP シートの記述を紹介したり、交流したりすることで自らの学びと他者の学びを比較、自らの学びの調整・修正、認識することを意識し実践した。パフォーマンス課題取り組み時には、これまでの自らの記述を振り返らせ、課題に取り組むことで単元のなかで不足していた資質・能力を改めて確認することができ、自己評価や分析に役立てることができたと考えられる。

図4 生徒のOPPシート

(3) 「言葉」と向き合うための工夫

「言葉」と向き合うために本校国語科では、パフォーマンス課題の工夫を以前から試みている。生徒の内発的な学習意欲を引き出すためにも必要な仕掛けとなる。今回の各学年の実践は、それぞれ「魅力」を伝えるための課題設定となっていた。それぞれの「魅力」を伝えるために単元の学習の中で、幾度となく「言葉」に向かい、「言葉」の魅力を発見し、「言葉」を再認識・再構築できたのではないかと考える。

実践からわかったことは、「言葉による見方・考え方」を働かせながら、「言葉」に向かっている力(姿)は、学習の前・中・後のどの場面においても発揮され、その力は複合的に発揮されるものであるということ。また、その姿を教師のみがみとるのは難しいということ。生徒同士による学び合いのなかで、「言葉」に向かっている力(姿)をみとることもできるかもしれないということである。「言葉」に向かっている力(姿)が発揮される場面と「言葉による見方・考え方」を働かせている場面は学習の過程で、何度も行き来をくり返すものであるということも確認できた。OPP シートへのコメントも生徒の自己調整に役立つフィードバックとして有効であることも再確認できた。



写真1 グループによる古典の魅力の交流



写真2 パフォーマンス課題(推敲)への取り組み

写真1は、「6年生に古典の魅力を紹介する」というパフォーマンス課題に対し、これまでの学習の中で見つけた魅力を交流している場面である。交流によって新たな気づきがあったというコメントや〇〇さんの見方が参考になったなど生徒同士による学び合いからも「見方・考え方」を働かせている様子がうかがえた。

写真2では、パフォーマンス課題に取り組む中で、言葉の使い方や表現の仕方について、グループの仲間と相談しながら推敲をしていた。その後、一度書いた文章を修正・加筆をしながら完成させ、再度グループに確認させていた。このように「言葉」に向かう場面と「見方・考え方」の働く場面は往還しながら深い学びにつながっていくのである。

2 課題

今回の実践を通しての課題を、下記に示し、次年度以降の研究につなげていきたい。

- ・生徒の学びに向かう力(姿)の変容のためには、単元前後の変容をみとる必要がある。
- ・各実践の中でどのような「言葉」にむかう力(姿)が発揮されていたかを分類する必要がある。
- ・生徒の「言葉」に向かう力(姿)をどのように評価するかを教科で共有しながら進めていく必要がある。
- ・パフォーマンス課題後の生徒へのフィードバックの方法を検討する必要がある。

〈 引用文献・参考文献 〉

- (1) 文部科学省「中学校学習指導要領 解説 国語編」平成29年7月
- (2) 沖縄県教育委員会「学力向上推進 5か年プラン・プロジェクトⅡ～学びの質を高める授業改善・学校改善～」令和2年3月
- (3) 櫻井茂男『学びの「エンゲージメント」-主体的に学習に取り組む態度の評価と育て方-』図書文化社(2020)
- (4) 堀哲夫『一枚ポートフォリオ評価 OPPA』東洋館出版社(2013)
- (5) 東京学芸大学附属小学校国語研究会『見方・考え方 [国語科編]』東洋館出版社(2018)
- (6) 田中千津子『国語の授業で「言葉による見方・考え方」をどう鍛えるのか-主体的・対話的で深い学び』の実現をめざして』学文社(2019)